

科目名	翻訳論特講	担当者	イノウエ ケン 井上 健	期間	通年	単位数	4
-----	-------	-----	-----------------	----	----	-----	---

【科目概要】

目的	近現代日本の翻訳文学を検討して、近代日本の文学者たちが、西欧文学から何を学び、そこから何を創り出していったのかを考える。西欧語から日本語への翻訳の過程において、いかなる規範が作動していたのか、西欧文学の受容の結果、文学や文化のシステムがいかに更新されたかを検証する。あわせて、世界の多文化状況を的確に把握し、その批判的検討を通じて、グローバル化の時代に相応しいコミュニケーション能力の獲得を展望する。		
到達目標	<p>【一般目標 (GIO)】</p> 翻訳というものを介して西洋近代を摂取し、消化し、自らの文化としてきた、近代日本の文学・文化を、翻訳研究、比較文学・比較文化研究の視点から、あらためて捉え直すことによって、日本近代文学・文化への、学際的、相対的、複合的視野を涵養する。		
	<p>【行動目標 (SBOs)】</p> 異文化交渉の諸相を、翻訳というプロセスに着目することによって、具体的に、可視的に把握する能力が獲得される。		
	<p>【準備学修項目と準備学修時間】</p> 翻訳論の基礎的文献にふれておく。 レポート1本に対して、45時間以上の学修を標準とする。		
学修方略 (方法)	<p>【アクティブラーニングの有無・学修媒体等】</p> manaba folio を使ったインタラクティブな添削指導を行う。		
	<p>【学修方略 (LS)】</p> まずは、教材、取り上げる作品をきちんと精読してから、一次資料、二次資料の参照に進む。レポート作成にあたっては、「何を明らかにしたいのか」という命題から出発し、それに基づいた構成、章立てを考え、「何が明らかになったのか」が読む者に明確に伝わるように記述する。その間、履修者と担当者間で、十分な質問やコメントのやり取りがあることが望ましい。		
スケジュール	前期：教材1のレポート課題(1)、レポート課題(2)の最終稿提出期限は、それぞれ、7月中旬、9月中旬とする。 後期：教材1のレポート課題(1)、レポート課題(2)の最終稿提出期限は、それぞれ、11月中旬、1月を課題提出締切日とする。		
成績評価	種別	割合	評価基準
	レポート	90%	論文にふさわしい構成、記述になっているか、結論に一定程度、独自性があるか、を判断基準とする。
	平常評価	10%	学習姿勢全般を評価の対象とする。
履修者への要望	レポート執筆は、学位取得論文の基礎工事部分に相当する。短いレポートがしっかりまとめられなくては、学位論文執筆はとうてい覚束ない。まずは教材を、自分が主たる素材として取り上げようとする作品や言説のテキストを、しっかりと読み解くこと。その上で、そこから課題、テーマを発見し、その解決に必要な調査をする。manaba のコミュニティや掲示板など、学習ツールを積極的に活用することが望ましい。分量は特に指定しないが、5,000字ほどが一つの基準となる。		

【レポート課題】

基本教材 1	
教材の概要	著者名： 井上健 教材名： 『文豪の翻訳力：近現代日本の作家翻訳』 （武田ランダムハウスジャパン，2011年） ISBN:978-4-27-000665-8 2,200円+税
	谷崎潤一郎から村上春樹まで、近現代日本の作家たちが手掛けた翻訳の検討を通じて、日本の作家たちが西欧近代文学から何を学び取ろうとしたのか、翻訳を自ら手掛けることが、彼らの文学に、その主題や文体にいかなる影響を及ぼしたかを、歴史を追って論じたものである。主に戦後作家の翻訳を論じた後半は、翻訳術を学ぶ実践的教材としても利用することができる。 <b>本教材が入手困難な場合は、図書館で『文学』（岩波書店）の2012年7、8月号「特集＝翻訳の創造力」を参照のこと。</b>
参考図書	安西徹雄『英文翻訳術』筑摩書房（ちくま学芸文庫，1995年）ISBN:978-4-48-008197-1 880円+税 柳父章『翻訳語成立事情』（岩波新書，1982年）ISBN: 978-4004201892 780円+税
履修上のポイント	翻訳という異言語・異文化を変換する営為の総体をとらえるには、その理論、歴史、実践を、バランスよく目配りしつつ学び、そうして獲得したものを総合していく必要がある。本科目においては、まず英文を日本語に変換するに際して、そこにいかなる原則、方法を設定できるかを、参考図書を中心にして検証する。続いて、そうして得られた知見をもとに、教材として指定した書を通じて、近現代日本の翻訳文学を検討して、大正、昭和の日本文学者たちが、西欧文学から何を学び、そこから何を創り出していったのかを考察する。
レポート課題 1	英日翻訳の方法について、事例に即して、なるべく具体的に論じなさい。 <b>留意点：</b> 品詞別（名詞、動詞、副詞など）、文法事項別（時制、話法、仮定法など）に一つ主題を設定して、英日翻訳にはいかなる原理原則を設定することが可能であるかを、事例を引きつつ論じる。
レポート課題 2	翻訳文学が近現代日本文学に何をもたらしたかについて、作家、作品になるべく具体的に言及しつつ論じなさい。 <b>留意点：</b> 近代日本の文学者たちが、西欧文学から何を、いかに受け入れていったのかを、訳文や文学作品を適宜、引用しつつ、具体的に検討する。

基本教材 2	
教材の概要	著者名： 柳父章ほか編 教材名： 『日本の翻訳論：アンソロジーと解題』（法政大学出版局，2010年） ISBN:978-4-58-843616-1 3,300円+税
	近代日本翻訳論のアンソロジーに解題を付したものの。近代日本において、翻訳文学、翻訳文化がいかなる機能を果たしてきたかを歴史的に把握することができる。
参考図書	佐藤・ロスベアグ＝ナナ（編）『トランスレーション・スタディーズ』（みすず書房，2011年） ISBN:978-4-62-207634-6 4,800円+税 三ツ木道夫（編）『思想史としての翻訳』（白水社，2008年）ISBN: 978-4-560-02477-5 3,400円+税
履修上のポイント	欧米の翻訳論、翻訳研究の歴史、水準に照らして、近代日本の翻訳論の系譜を、いかに評価し、いかに位置づけるかを検討する。参考図書は、1980年代以降、進展してきた、西欧の「翻訳学」（Translation Studies）の概要をたどり、その日本文化への適用の可能性を模索した論集。なお、欧米の「翻訳学」の優れた入門書としては、ジェレミー・マンディ『翻訳学入門』（みすず書房，2009年）などがある。
レポート課題 1	日本の翻訳論から一篇を選んで、その主張するところをまとめ、それが翻訳論としていかなる歴史的意味を持つものであるかを論じなさい。 <b>留意点：</b> 翻訳を論じる際に必要な用語や概念については、あらかじめ基礎知識を修得しておくことが望ましい。
レポート課題 2	日本の翻訳論から一篇を選んで、西欧語をベースとした翻訳論と比較することによって何が見えてくるか、翻訳および翻訳論の日本的特性について論じなさい。 <b>留意点：</b> 比較文学・比較文化の視点に立脚しつつ、日本と西欧との翻訳論を比較、検討する。